令和５年度　専攻科学生選抜学力試験問題用紙　小論文

次の文章を読んで，以下の問いに答えなさい。

ハイキングはわたしのような，とりたてて熱中するもののない子供には最適な時間の過ごし方だった。母からかつて革製の日記帳をもらったことがある。背表紙には金文字で名前が刻印されるはずだったのだが，印刷工房の手違いで「ROBERT MOON」と彫られてしまった。ところが，この間違いは不思議と馴染んだ。成長するにつれ，わたしは地球の外にはみ出ているように感じることが多くなった。孤独だったとか，いじめられたということではない。ただ，いつも自分の居場所はここではないと感じていた。大学に入学するまで，ゲイであることは誰にも言っていなかったし，ゲイの知りあいもいなかった。わたしは懸命に周囲に溶けこもうとした。義務的にスーツとタイを着け，春のパーティや舞踏会，卒業パーティに出席した。スポーツや初デート，友人宅の地下で酒を飲むといった状況では，それぞれにふさわしい格好をした。でもそのあいだずっと，心のどこかで疑問を抱いていた。わざわざこんな手の込んだ服装をすることになんの意味があるんだろう，と。

すぐ上の姉とは十歳近く年が離れていた。予期せぬところにできた子供だったからはじめはちやほやされたが，十歳になるころには，だいたいいつも放っておかれ，自分のことは自分でするようになった。悪い遊びを覚えてもおかしくなかったのだが，わたしは部屋で本ばかり読むようになった。それは危険を冒したり親を悲しませることなく家から逃げだす方法だった。小学三年生くらいのころから，一本の煙草を消すまえから次の一本を取りだすチェーンスモーカーのように次々と本を読んでいった。

本格的に読書をするようになったきっかけは『大きな森の小さな家』の薄いペーパーバックだった。イリノイ州北部のわたしの家は，作者のローラ・インガルス・ワイルダーが一八六七年に生まれた場所から南東にわずか数百キロのところだった。それでも，彼女が書いているウィスコンシン州の巨大な森はまるで未知の世界だった。「まる一日，あるいは一週間，それどころか一カ月歩きつづけても森以外何もなかった。家もない。道路もない。人もいない。ただ木々が生え，そこに棲む野生動物だけがいた」。わたしはインガルスの孤独と自信に魅了された。

このシリーズを何冊か立てつづけに読んだ。それを知った先生は，ほかの本も読んでみたらいいと優しく言ってくれた。それから数年のうちに，『大きな森の小さな家』から『ひとりぼっちの不時着』［ゲイリー・ポールセン作の冒険小説］，『ウォールデン 森の生活』［ヘンリー・デイヴィッド・ソロー作］，『野生のうたが聞こえる』［アルド・レオポルド作］，『ティンカー・クリークのほとりで』［アニー・ディラード作］へと読み進めていった。野外生活の細部をあれこれ想像するのは楽しかった。パイン・アイランドではじめて夏を過ごしたころ，わたしは別のジャンルの冒険ものの本を発見した。まずはマーク・トウェインやジャック・ロンドンの少年冒険小説，それからジョン・ミューアの山岳関係の著書，アーネスト・シャクルトンの南極探検，ロビン・デヴィッドソン［オーストラリアの砂漠を，ラクダと犬だけを連れて女性ひとりで横断した記録文学『Tracks/足跡』の作者］やブルース・チャトウィン［紀行文学作家。作品に『パタゴニア』など］の実体験に基づく冒険物語などだ。

わたしが愛読したアウトドア作家は，ひとつの土地に深く根ざした人たちと，誇りをもってなにものにも束縛されない人たちという，ふたつの系統に分かれる。より強く惹かれたのは漂流者たちだった。自分には土地や祖先，文化，共同体，ジェンダー，あるいは人種との深いつながりはなかった。とくに宗教的でも，宗教に反感を抱いているわけでもなかった。家族はばらばらだった。両

親はどちらもテキサス出身で寒い北部に住んでいたが，わたしが学校に行くころには離婚していた。それから間もなく，ふたりの姉は遠くの大学に進学して家を出，それきり戻ってこなかった。わたしには落ち着きのない血が流れているようだった。

一年のうち九カ月間は，研究所の講堂から講堂へと渡り歩き，服装を変え，覚えたての方言で話した。夏のあいだはしだいに原生自然（ウィルダネス）[「人間によって開拓されていない土地」を意味するが，「人間を恐れさせる未開の地」を表す場合と，「人間の手で汚されていない価値ある自然」を表す場合がある。本書では前者を「原野」，後者を「原生自然」と訳し分ける] に滞在する期間が長くなっていったが，ありのままの自分でいられるのはそのときだけだった。アパラチア山脈からロッキー山脈，ベアトゥース，ウィンド・リバー・レンジ，アラスカ山脈の雪に覆われた山並みに登った。それから，メキシコやアルゼンチンの高山に。山の上では礼儀作法など気にせず自由に歩くことができた。

大学の夏休みのうち二回は，パイン・アイランドに戻って子供たちをアパラチア山脈にハイキングに連れていくバイトをした。アパラチアン・トレイルを歩いていると，ときどきトレイルの全行程を何カ月もかけて歩いているハイカーに遭うことがあった。これら「スルーハイカー」たちはすぐに見分けることができた。彼らは奇妙な「トレイルネーム」を名乗り，食欲旺盛で，オオカミのような軽い足取りで歩いていた。わたしはそんな姿にいくらか怯んだが，同時に羨ましさも覚えた。どこか昔のロックミュージシャンのようだった。長髪で髭を伸ばし，痩せこけ，謎めいた隠語を使っていた。放浪の暮らしを送り，存在に対する意識が希薄で，ある意味で英雄的だった。

ときどきスルーハイカーたちにチーズの塊やキャンディを差しだして話しかけてみた。スコットランドのキルトにサンダルという姿でずっとトレイルを歩いてきた老人や，テントを持たず羽毛の枕だけを持っている若い男に出会った。なかには熱心に布教活動をしている人や，経済はいずれ行き詰まるからそれに備えているという人もいた。話をした人々の多くは，仕事を辞めて次の仕事に就くまでのあいだだったり，学校と学校のあいだだったり，あるいは離婚して次の相手を探すまでのあいだだったりした。戦争から帰還した兵士や，家族を亡くしたばかりという人もいた。彼らは決まって，「頭をすっきりさせる時間が必要だったんだ」とか「これが最後のチャンスだと思って」と言った。ある年の大学の夏休み，わたしは若いスルーハイカーに，自分もいつかやってみたいと話した。すると彼は「中退しろよ」ときっぱりと言った。「いますぐやればいい」

わたしは中退しなかった。そこまで大胆にはなれなかった。二〇〇八年にニューヨークに引っ越し，いくつか賃金の安い仕事をした。自由な時間にはスルーハイク（トレイルの全区間を一シーズン内に歩くこと）の計画を練った。ガイドブックやインターネットの掲示板を読み，仮の日程を立てた。一年もしないうちに出発の準備は整った。

多くの人とは違って，わたしにはロングハイクをする明確な動機もきっかけもなかった。大切な人を失ったわけでも，薬物依存から回復したばかりでもなかった。何かから逃げていたわけでもない。戦争に行ったこともなく，心の病にも罹っていなかった。ただ，ちょっと変な考えを起こしただけなのだろう。わたしのスルーハイクはほんとうの自分や心の平和，あるいは神を求める試みではなかった。

たぶんみんなが言うとおり，わたしも頭をすっきりさせる時間が欲しく，これが最後のチャンスだと思ったのだろう。使い古された文句の常で，そのどちらもまるで的はずれというわけではなかった。それに，**①何カ月も原生自然のなかで自由に過ごすとはどういうことか知りたい**という気持ちもあった。けれどもそれ以上に，子供のころから絶えず意識していた困難をやり遂げたいという

思いのほうが強かった。自分が小さくて弱かったころには，トレイルを踏破するのは超人的なことのように思われた。だが成長するにつれ，その現実的なむずかしさがより正確にわかるようになっていた。（中略）

山頂で，待ち望んだハイクを始めるにあたり，わたしは立ち止まって下界の景色を眺めた。霜が降り，茶色から灰色，青と，遠ざかるにつれて霞(かす)んでいく。山並みは上下し，交錯している。町も道もまったく視界に入らない。もしトレイルがなかったらメインにはきっとたどり着けないだろう。この見知らぬ，複雑に入り組んだ地形では，隣の尾根に着くことさえかなりむずかしそうだ。これからの五カ月間，トレイルがわたしのライフラインになる。

トレイルでは，歩くことはあとに従うことだ。権威にひれ伏し，あるいは見習い工が親方に従うように，トレイルを歩くには謙虚さが要求され，またそうした態度が自然と体に染みついてくる。パックを軽くするために，わたしは地図もGPSも持ってきていなかった。薄いガイドブックと緊急用の小さなコンパスのほか，進むべき方向を知るほとんど唯一の情報源がトレイルだった。ギリシャ神話でアリアドネからもらった糸玉をたぐって迷宮の出口を目指すテセウスのように，わたしはそれに頼った。

夜につけていた日記のなかで，わたしはある日こう書いている。「自分の命が善意だけではない神の手のなかにあることを感じる瞬間がある。再び登るためだけに尾根を降りていく。回避するルートもあるのに，あえて急な山頂を通ることもある。一時間に三回も同じ川を渡り，足がずぶ濡れになることもある。どこかの誰かが，トレイルがそこを通ると決めたからだ」

決断が自分のものではないと知るのは変な感覚だった。最初の数週間に，わたしはかつて聞いたことがある有名な昆虫学者のE・O・ウィルソンに関する逸話を何度も思いだした。一九五〇年代後半に，ウィルソンはしばしば客人を楽しませるために特殊な液体薬品を使って紙に自分の名前を書いた。すると大量のハリアリが巣穴から出てきて，まるで楽隊の隊員のように彼の名前のそれぞれのアルファベットの上に整列した。

そのトリックは科学上の大発見を基にしていた。何世紀もまえから，科学者たちはアリが目に見えない道をつくっていると考えていたのだが，ウィルソンはそれに使われるのが指のような形をしたデュフール腺という小器官であることをはじめて解明したのだ。腺をハリアリの腹部から取りだし，それをガラスのプレートに塗ると，ハリアリはそれに群がってきた（「彼らはわたしが目印をつけた道を目指して押しあいながら殺到した」とウィルソンは回想している）。彼はのちにこのトレイルをフェロモンと結びつけた。わずか一ガロン（約三・八リットル）のフェロモンで，一兆ものハリアリを集めることができる。

一九六八年，ミシシッピ州ガルフポートの研究者グループがウィルソンのトリックをさらに発展させた。ある種のシロアリがごく普通のボールペンで書かれた線に従うことを発見したのだ。ボールペンには，シロアリがフェロモンと勘違いするグリコールが含まれているためだ（どういうわけか，シロアリは黒よりも青のインクを好む）。それ以来学校では理科の先生が紙に青い螺旋(らせん)状の線を引き，シロアリがそれに沿ってウロウロするのを見せて生徒を楽しませるようになった。

スルーハイク中，トレイルが大きく曲がっていくと，わたしは残酷な円に沿って進むシロアリの気分になった。ある意味で，トレイルとは問答無用の決定論を表している。「人間は好きな方向へ行き，やりたいことはなんでもやる」とゲーテは書いている。「だが結局は，自然があらかじめ描いていた道に必ず戻ってくる」。アパラチアン・トレイルも，まさにこのとおりだった。わたしは周囲の森を散策したり，ヒッチハイクをして町へ降りたりしたけれど，結局いつもトレイルに戻っ

てきた。ゲーム盤の上を前後に棒で動かされるだけの，ホッケーゲームのプラスティックの人形と同じだと思ったこともある。これなら，あらかじめ決められた溝に沿って突進しているのと変わらない。不確実性こそが冒険の本質だとしたら，これのどこが冒険といえるのだろう。（中略）

自由を求める者と自然愛好家，そして変人たちといった仲間のスルーハイカーとつきあっているうちに，わたしたちがみな一本の道に好きこのんで束縛されているのは奇妙なことのように思えてきた。ほとんどの者がこのハイクを，大人としての複雑な生活に帰っていくまでの，つかの間の**(A) 際限のない自由**だと考えていた。ところが，トレイルが与えてくれるのは**(B) 完全な自由**ではなかった。むしろまったく逆で，トレイルでは選択肢がうまく減らされていた。トレイルが与えるのは**(C) 川の自由**であって，**(D) 海の自由**ではなかった。

一言で言うなら，道を歩くとは世界を理解することだ。ある場所を通り抜けるには無数の通り方がある。選択肢は膨大で，落とし穴も多い。道の機能とは，この混沌を理解可能な一本の線に変えることだ。古代の予言者や賢者たち（彼らのほとんどは主に徒歩で移動していた）はこの事実を理解していた。主だった宗教のほぼすべての根本経典で道の隠喩が用いられているのはそのためだ。ゾロアスターはしばしば高みや，成長，知恵への道について語る。ヒンドゥー教でも精神的な自由への三つの道（マルガ）を命じる。ゴータマ・シッダールタ［釈迦］は八正道を説く。タオは，その言葉自体が“道”を意味している。イスラム教では，ムハンマドの教えはスンナ（これもやはり「道」）である。聖書もまた道と交わっている。「昔からの道に問いかけてみよ。どれが幸いに至る道か，と。その道を歩み，魂に安らぎを得よ」と主は異教徒に言われた（しかし，彼らは言った。「そこを歩むことをしない」と）。

キリスト教の預言者も言っているように，山の上にもたくさんの道がある。人が世界を歩み，何が正しいかを探究する助けになるかぎり，その道には存在価値がある。精神的な指導者で，知恵への道など存在しないと説く人物はほとんどいない。仏教の禅師にはそれに近い人もいるが，道元でさえ座禅は「仏道へのまっすぐな道だ」と述べている。インドの哲学者ジッドゥ・クリシュナムルティはこの点で異質だ。「真理に道はない」と彼は書く。「あらゆる種類の権威は，とりわけ思想や学問などの分野では，きわめて破壊的であり邪悪だ」。道はないという彼の道には，ムハンマドや孔子のように詳細な指示を与えてくれる教えと比べて多くの信奉者は集まらなかった。人生の荒涼とした風景のなかで迷っている多くの人々は，目印すらない原野での目眩（めまい）がするような自由よりも，道による制限を選択するだろう。

（※ 常用漢字でないものには振り仮名を付してある）

出典：ロバート・ムーア，2019，『トレイルズ：「道」を歩くことの哲学』エイアンドエフ.

問１　下線部①について，著者は「何カ月も原生自然のなかで自由に過ごすとはどういうことか知りたい」と書いているが，原生自然のなかの自由とは実際にはどのようなものであったと著者は述べているか。(A) から (D) のなかから選び，その記号を答えなさい。

問２　著者は，トレイルを歩くとは結局のところなにをすることだと述べているか。端的に説明している箇所を，本文中から 18 字で抜き出しなさい。

問３　本文では，トレイルを歩くという営みに関連してふたつの自由観が提示されている。それぞ

れの自由観を明確に定義したうえで，それらの自由観を踏まえて，人間の人生における自由の意義について，あなたの見解を述べなさい。なお，700 字以上 1,200 字以内で記述すること。また，字数が700字に満たないものは採点の対象としないことがあるので注意すること。

注意事項

- 草稿用紙は，メモなどに自由に使用して構わない。
- ただし，解答用紙・草稿用紙ともに試験終了後に回収する。
- 解答用紙・草稿用紙は，未使用のものもすべて記名し，試験終了後に提出すること。